

# 弦の話

- |                    |                       |
|--------------------|-----------------------|
| 2 麻弦・合成弦<br>弦は折らない | 14 巻き始める位置            |
| 3 よりをもじまつい         | 15 中仕掛                |
| 4 新弦をほぐす           | 21 道宝                 |
| 5 弦の長さを決める         | 22 弦巻                 |
| 6 赤い布のヒコ           | 23 くすね                |
| 7 弦輪を作る            | 24 麻ぐすね               |
| 9 弦をひき締める          | 26 仕掛麻                |
| 11 弦に目印をつける        | 28 弦の補修               |
| 12 中仕掛の位置          | 29 弦と中袋               |
| 13 矢番えの位置          | 30 Fa弦輪               |
|                    | 31 上の弦輪を裏返す<br>弓を張るとき |
|                    | 32 雨と中仕掛<br>休め弦(弦休め)  |

2020.1.

KURO

浦上栄先生は著書のなかで

うつほなる矢の根はさびて弦ほぼけ

弓射るばかり弓を射るかは

と古歌を引用されて、弓を射ることは大切ではあるがそれだけではなく弓具の取扱いやその手入れについて学ぶことも射手にとって大事な常識である旨を述べておられます。

また昔は五射六科と古く修養の項目もあって射手には巾広く射技や知識を身につけることが求められていました。

弓道の道具と云えば弓であり矢のことでしょうが、これらについては多くの書物もあり、また指導者も教えます。

しかし弦についてはどうでしょうか。まわりを見渡しても弦のことをあれこれと記した資料は、なかなか見当りません。

そんなこともありこれから楽しく弓を続けて参段四段を目指すような方に参考になればと思ひ立ち、あれこれと書いて見ようと思ひます。

云々までありませんが以下は単なる一つの考え方であり意見にすぎないことをご承知下さい。

また昇段の審査ではこうした知識は問われることはなく、役立ったのでもありません。

弦には麻弦と合成弦(化学合成繊維弦)の2種類があります。麻弦は天然素材の麻で記憶するところでは昭和30年代はすべて麻弦であり、合成弦はその後に開発されたものです。

麻弦の材料となる麻は大麻取締りの法律で国内での栽培が制約されることから今では東南アジア等海外産の麻が多く用いられるようになりました。その為か昔の弦に比べて今の麻弦は切れ易く寿命が短くなっています。国内の麻と海外の麻とのちがいは麻自体の強さが異なるのか、繊維自体の長さが異なるのか色々な説は耳にするのですが、また調べても見ましたがはっきりしたことはまだわかっていません。

麻弦と合成弦のちがいは一般的に価格と耐久性とのみとわかれていますが引き味にも大きなちがいがあるとわわれています。引き味のちがいと違って自分には感性が鈍くて実感出来ませんが感覚の鋭い友人によると麻弦は引き味が柔らかく引いていて心地良いと云います。それに対して合成弦の引き味は針金を引いているように硬く引き心地も歴然としていると云います。

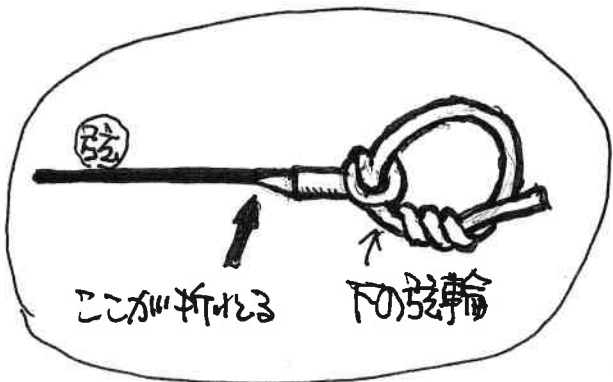
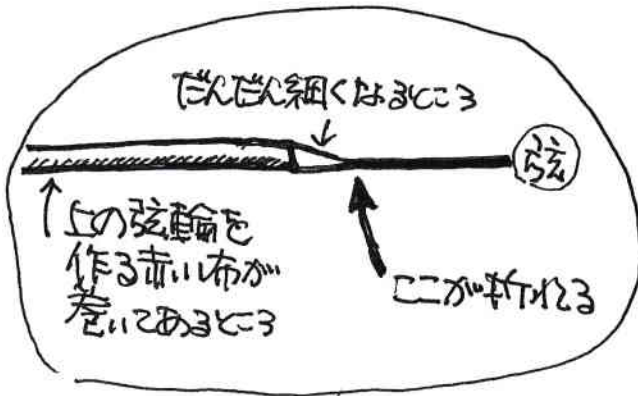
(もっともこの引き心地についても最近の合成弦は)かなり改良されて来ているとの声もあるようです。

麻弦と合成弦にはこうしたちがいがありますが以下の説明は現在多く使用されている合成弦について説明することと致します。

弦を取扱ううえで注意することか2つあります。

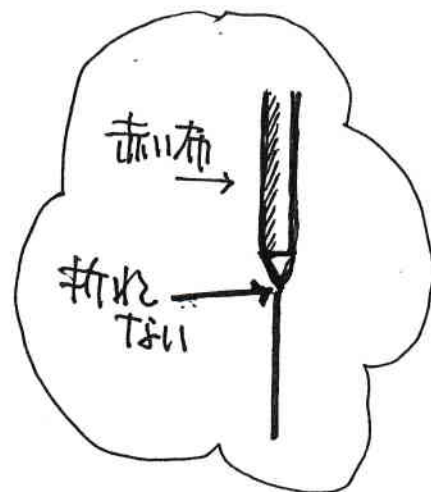
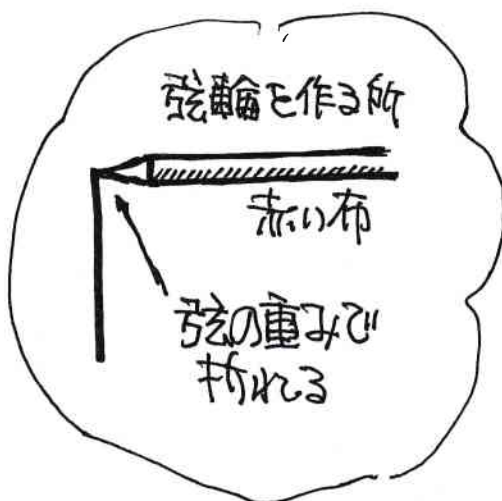
- ① 出来るだけ折らないように扱う
- ② 繊維のより(捻り)をもどさないように扱う

それでもどうしても折れるところか2か所あります。それは弦の両端で、弦の本体から弦輪に続くところで直径が変わる所です。



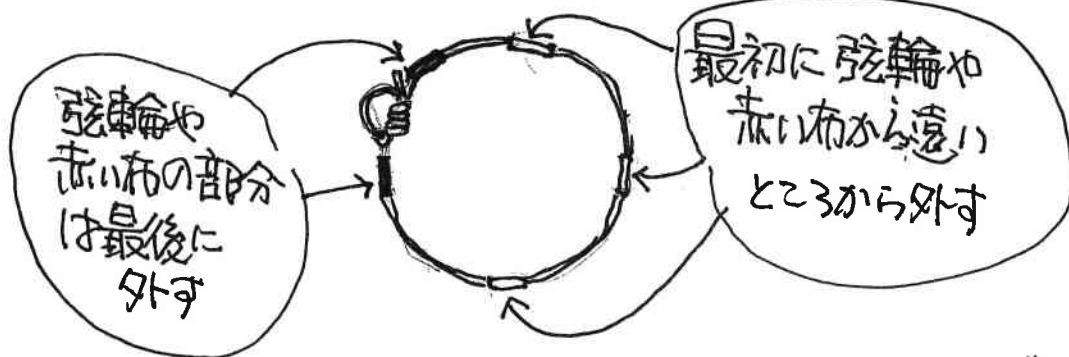
この2か所は折れやすいものですが、(まず)折れることは避けられません。それでもなるべく折れ癖がつかないように、また折れてもその程度が軽くするよう心懸けることです。

たとえば、弦輪を水平に持って弦を下に垂らせば弦の重みで折れてしまいます。弦輪を垂直にすれば折れることはありません。

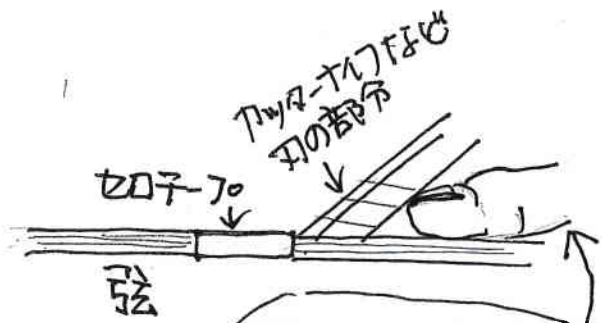


# 新しい弦をほくす

輪になっている弦をほくす時、弦を留めている糸やセロテープを外します。この時も弦輪や赤い布の部分は最後に外すようにします。これは弦輪や赤い布の部分の重みによって弦との境目の折れを防ぐためです。



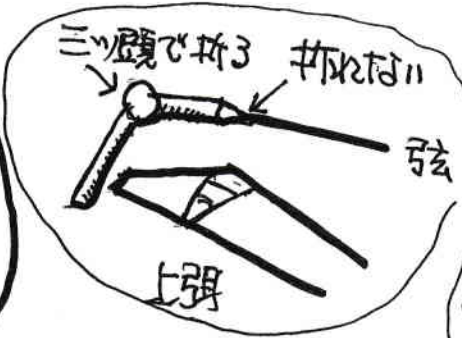
糸やセロテープを切る時はナイフの刃で弦を傷つけないよう刃は弦とは反対の向きに使用します。



刃先を上に向け親指も弦に添えて親指を支点にしてナイフも上下に動かす。又は親指でナイフを前に押しすすめる

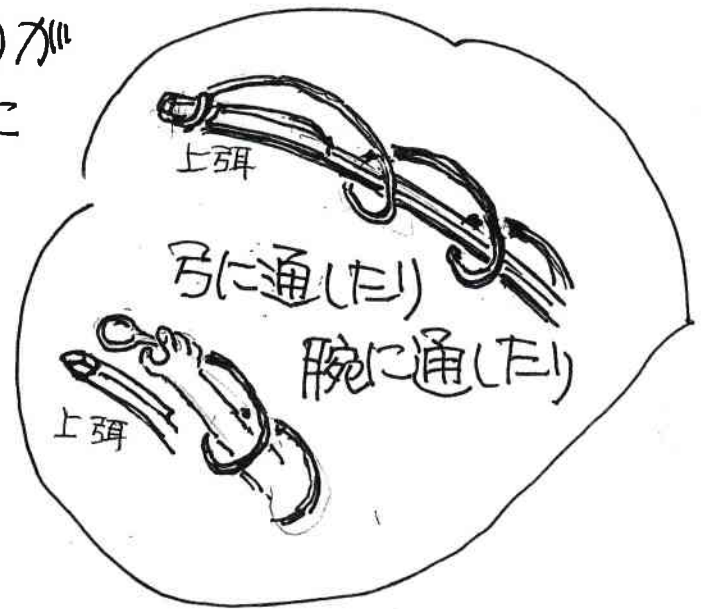
糸やセロテープを外しても弦のくすねでくずにほくれない時は弦輪と赤い布の部分をゆるく持ち軽く床に打ちつけるとほくれます。

弦がほくれたら下の弦輪のミツ頭を折曲げ？上の弦に掛けます。ミツ頭を折曲げずに掛けると弦本体との境目で弦は折れます。



このことをわきまえていれば「ミツ頭を折曲げなくても、真直な状態の弦を上弦に掛けて弦に張力をかけながら次に進むことも可」です。

弦を延ばす時もより(纏り)が  
戻ったり折れたりしないように  
注意して取扱うことです。  
右のように弓に通したり  
腕に通すこともひとつの  
方法です。



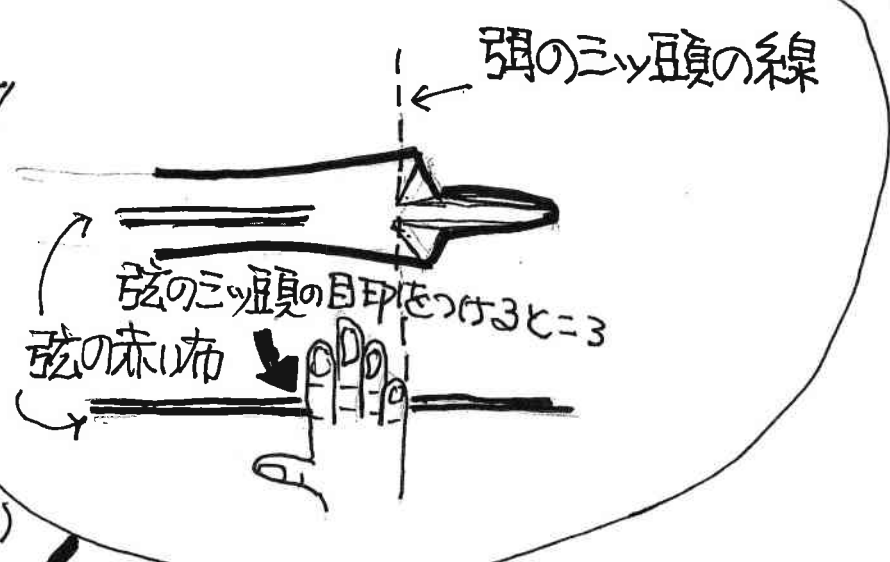
### 弦の長さを決める

弦の下輪を弓の上弮に掛けて弓の内竹に沿わせて下弮に  
まで伸ばします。

右手の指を揃えて弦にかぶせます。

下弮の三ツ頭（三ツ頭）に小指を当て食指(小指)の外側のところで  
赤い布で覆われた弦にサインペンで印を付けます。  
ここが弦輪の三ツ頭となるところです。

(浦上栄先生の著書 100ページ)



※ 出来上がった弦  
は伸びるここが  
はいぶようにあとで  
縮めるので、  
希望する把の  
高さより若干(17~8ミリ)  
高く作るようにします。

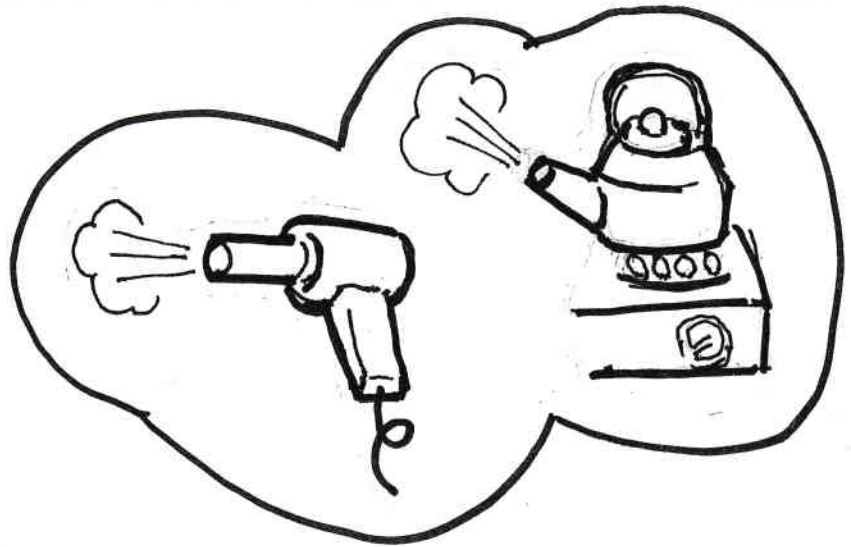
# 赤い布のところ

麻絃の場合は竹筒のような丸い物で強くしごけば柔らかくなります。

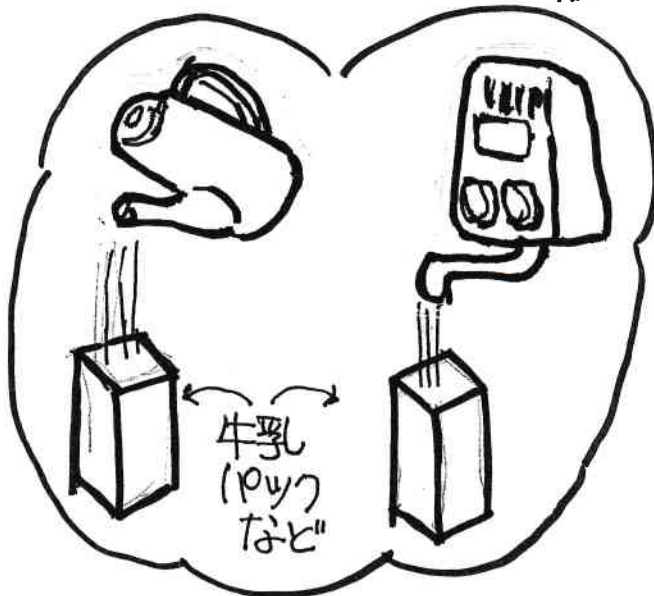
合成絃は揉んでもしごいても柔らかくならず温ためることが必要です。

一般的にはヘアドライヤー-ヤスークあるいはヤカンの湯気を利用します。

\* 絃本体との境目が折れないように注意して取扱います。



温風や湯気のように一般的ではありませんが熱湯に浸す方法もあります。



○ 熱湯に浸す場合は弦論を作る前にハソカ子等で木気を拭きます。

○ 赤い布が緩む時は指で巻き直し糊で補修します。

# 弦輪を作る

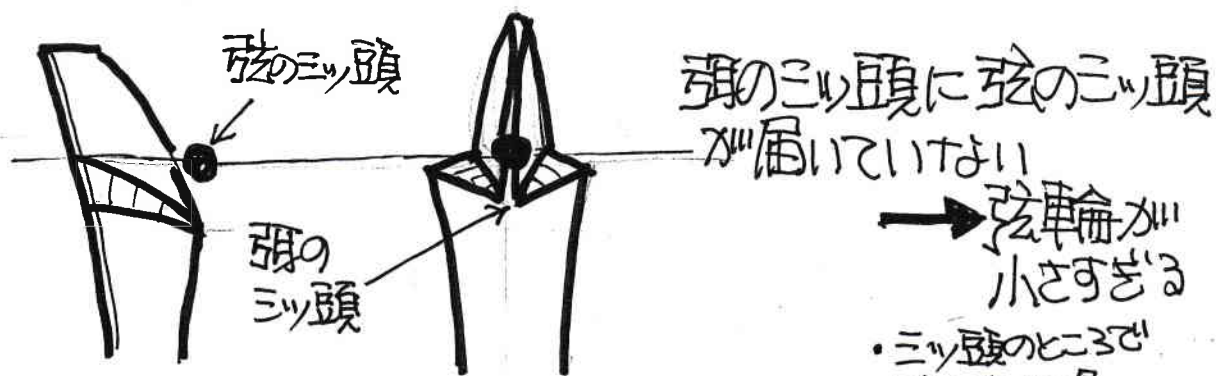
作り方は弦の袋や多くの本に書かれていますかよく見て覚えて作り慣れることです。

引いているうちに弦が伸びて把が低くなる → 弦輪の作り直しは良くあることですが、その原因のひとつは弦輪の作り方にあります。

弓の大きさにピッタリ合った大きさの輪にすること。

もじり(捺り)を正しく作ることの2つが良い弦輪のポイントです。

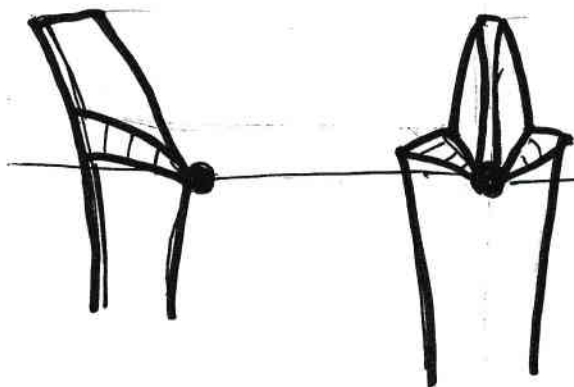
弓に合った弦輪とは次のようなことです。



弓の三ツ頭に弦の三ツ頭が届いていない

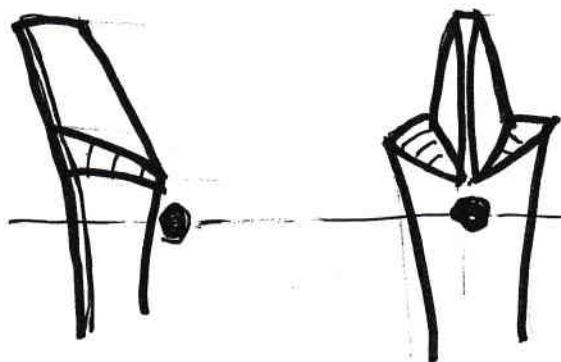
→ 弦輪が小さすぎる

・三ツ頭のところで弦が切れる  
俗に喰い切ると言う



三ツ頭と三ツ頭が重なる

望ましい弦輪の大きさ

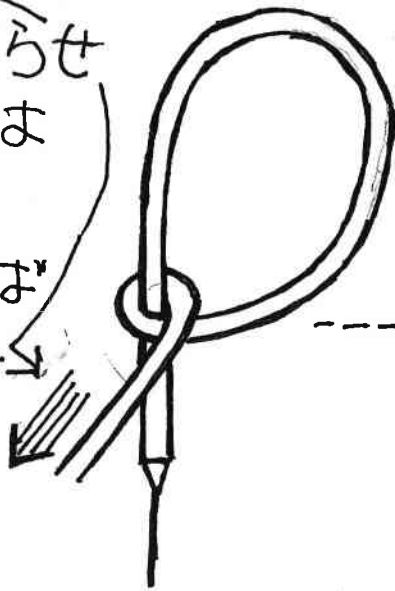


弦輪が大きすぎて弓の三ツ頭との間が空いている

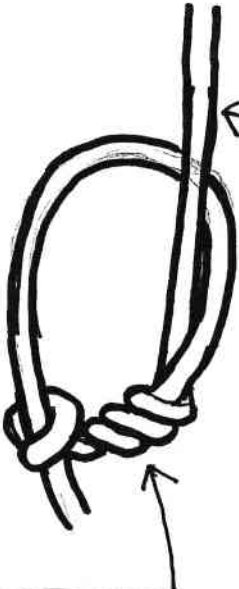
一番多く見られる例で弦の伸びる原因のひとつ



輪を最初にくぐらせた赤い布のところは強く引張ります。力が足りなければ歯でくわえて...



裏側の2本もすきまなく



もじりの先はなるべく切らない

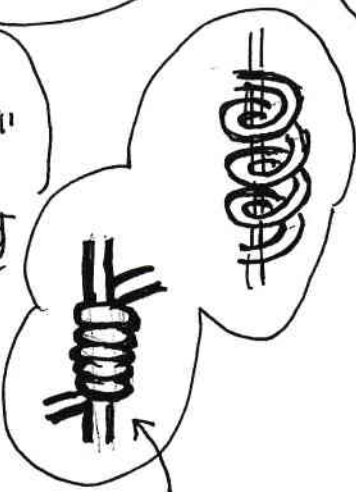
むかし和船の航海安全を祈願して付けられた船先の縁起物に由来するもので切らないと言う説があります。

また麻弦の弦師谷口氏(故人)はわざわざ赤い布の先端1~2センチは麻を出して仕上げていたと聞きます。

しかしその一方で余分は切るように指導する指導者もあります。自分の指導者に従うことで良いと思います。

もじりは縄をなうようによりあわせ2~3回巻きます。

新弦の下の弦輪がもじりの見本です



ただグルグルと巻くだけ

一番良く見られるもじりは「コイルスプリング」のようにただグルグルと巻いているものです。縄をより合わせるようなもじりに比べると相互の摩擦が少しく、弦輪が緩む→弦が伸びて把が低くなる原因の一つになります。

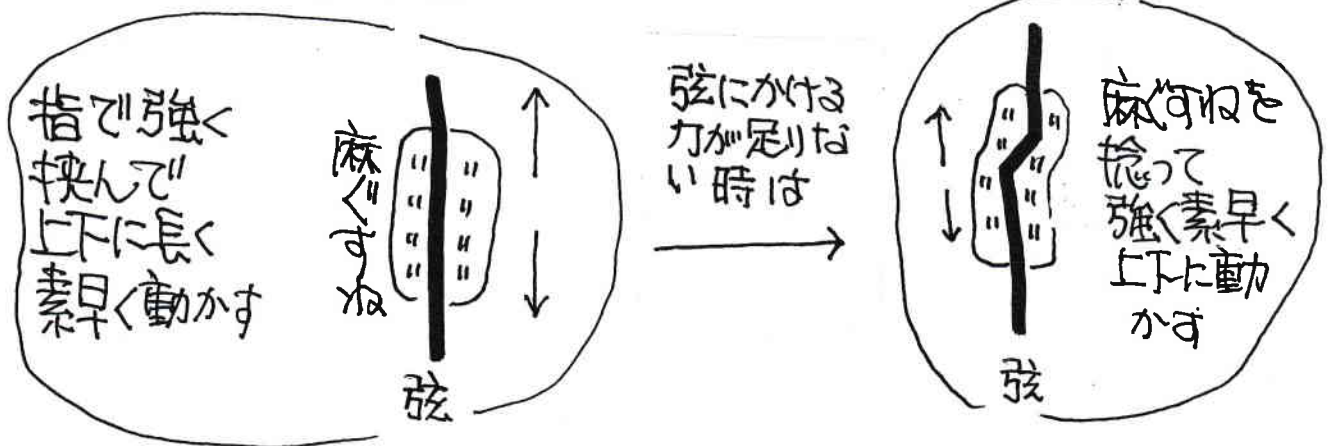
# 弦をひき締める

使っているうちに弦が伸びて把が低くなる場合があります。  
よほど粗悪な弦でない限り、把が下がる原因は弦輪の作りかたが緩いことと、弦のよりが締ってきた結果弦が伸びる  
ことの2つであると思われる。

中仕掛を作るのに先立って弦輪と弦のよりをひき締めます。

用意するものは麻ぐすねだけですが出来ればくすねを挟み  
こんだ麻ぐすねが望ましく、くすねが用意出来ない時は麻ぐ  
すねにギリ粉を挟んでも代用することが出来ます。

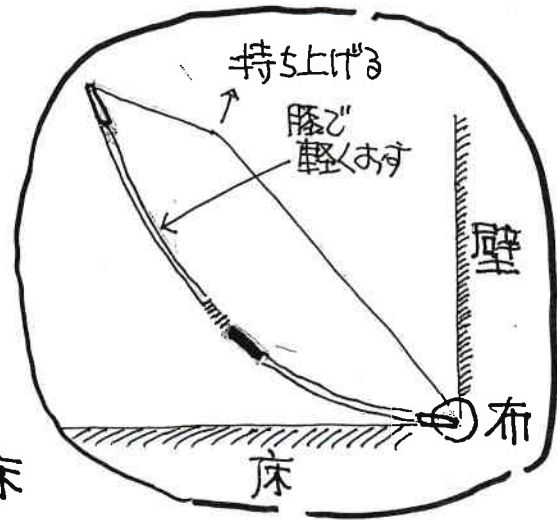
この時の麻ぐすねの掛けかたは弦の上端から下端までな  
るべく長いストロークで素早く強くかけます。麻ぐすねは指で  
強く挟んでかけますが、挟む力が足りない時は麻ぐすねを指  
で捻れば強く挟めることになります。



長いストロークで素早く強く掛けることで、摩擦の熱でくすねを軟  
らかくし、弦の繊維にしっかりと浸み込ませます。この時はくすねが  
溶ける独特の匂いが立ち弦も熱を帯びるかわかるはずで

上の弦車輪のところは鬮板と弦の間隔が少く麻ぐすねは掛けにくいところだ。弓を安定した床と壁の隅に布をはさんでおしつけて弓の鳥肩節(教本参照)あたりの内竹に膝をおしあて弦を手前に持ち上げて麻ぐすねを掛けます。

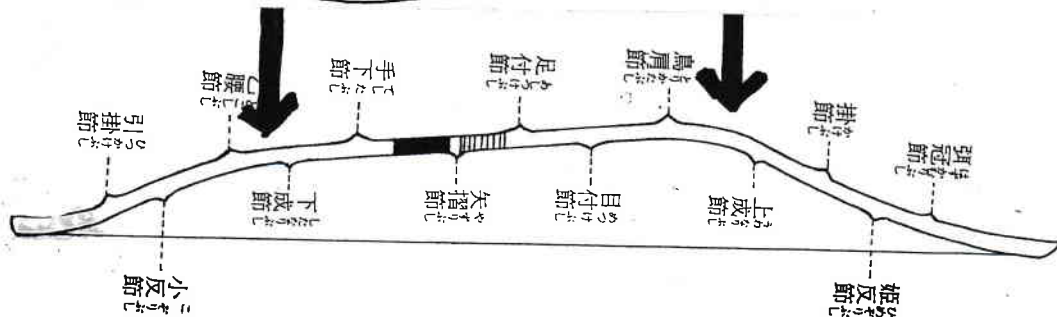
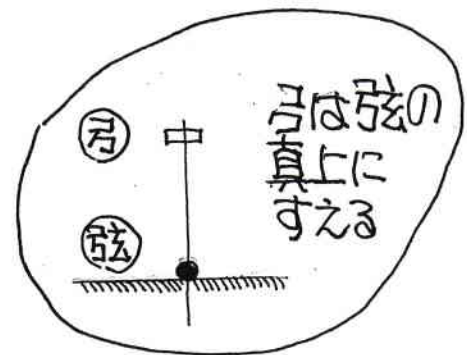
ただし膝で弓をおす時は弓のかたさを狂わせぬよう注意し軽くおします。



しっかりと麻ぐすねをかけたなら弦があたたかいうちに弓を横にして床に置きます。弦は下にして両膝で軽く

おさえ弓は弦の真上にして両手で弓を静かに押します。

左右の手はバランスに注意し呼吸を合わせる気持ちで慎重に優しく押し下げます。



手をあておさえるところは弓の上と下で成がふくらんでいるところで教本の図で示せば上の図のところになります。

麻ぐすねを掛ける → 弦があたたまる → 静かにおさえることを2~3回繰り返せば把の高さを安定します。うまく出来れば切れるまで持ちます。